

旅行紀行文を製作

ワープロで思い出つづる

今年四月に定年退職しまして、五月に妻と二人で、以前から行ってみたと思っていた能登を中心に、旅行に行きました。その旅行をきっかけに、ワープロで旅行紀行文を作ってみようと挑戦しました。

ワープロはほとんど触れたことがなかったものですから、手で書

くようにスラスラとはいかず、文字を確かめながら打っていきしました。文章を頭の中で考えながら手を動かすため、紀行文三ページ分を完成させるには苦労しました。しかし、文の中には旅先で回った福井県の永平寺、金沢の兼六園、能登の御陣乗太鼓などが浮かんできます。

仕事がある時は、全国を車で回りましたが、今度は妻と二人で旅行を楽しみながら、旅先の思い出をワープロで紀行文に残していこうと張り切っています。

1997/07/04(金)

佐久新聞

投票時間延長

効果あるか

下降線をたどっている投票率を上げるために、投票時間を二時間延長して午後八時までとするなど公職選挙法改正案が、国会に提出された。投票時間の延長で果たして投票率が上がるのか、私は大変疑問に思う。

相変わらずの政党による派閥政治、政治家の汚職や、有罪になっても議員を続けたり、国民生活に密着した政治が行われていない。

そうした政治への不信感が、棄権という一つの抵抗手段として表れているのではないか。

特に若年層に棄権が多いと聞く。若い時は政治に関心を持つ時期だ。これからの日本を背負っていく若い人たちを引きつけるような政治を取り戻さない限り、棄権という意思表示はなされるだろう。

また、不在者投票を緩和するというが、いちいち市役所まで行くより、封書で投票するとか別の方法を検討する必要がある。一考を望みたい。

1997/11/13(木)

信濃毎日新聞 建設標

踏切で救助した 村田さんを悼む

横浜市の遮断機が下りた踏切内で、横たわっていたお年寄りを助けようとした村田奈津恵さんが、電車にはねられ亡くなった。村田さんは父親の車に同乗し、電車の通過待ちをしていたが、助手席からとっさに出て救助に入った。お年寄りは一命を取り留めたが、村田さんは父親の目の前で亡くなってしまった。

一瞬の出来事で、あまりにも痛ましいが、勇気ある行動に、何と表現してよいかわからない。このような場面に直面した場合、とっさに自分だったらどのような行動が取れただろうか。

村田さんは早く助けなければと飛び出したのだろうが、このような行動は、教えられるものではないと思う。

父親は娘の行動を責めず、お年寄りの一命が救われて良かったと思うしかないと話している。村田さんのご冥福をお祈りしたい。

2013/10/10(木)
信濃毎日新聞 建設標

建設標と父

「読んだよ」と実家の父に電話をする。

「ああ」と照れくさそうな声が返ってくる。

少し間をおいて父が「みんな元氣か」とたずねる。「うん。また行くわ」と言って電話を切る――。

父が建設標への投稿を始めたのは、会社を定年退職してからだ。以来十年が経過した。

元々意見を述べるのが好きだった。

た父。投書が載ると知人からも電話があるらしく、長話になってしまいうことも多いとか。掲載されたこと以上に、反応の方がうれしいらしい。

私が実家を離れて三十年近くになる。両親とは同じ県内に住んでいないが、一、二ヶ月に一度しか帰らないけれど、父の投稿を見ては「元氣でやっているんだな」と思いう安心する。

その建設標が見やすくなった。文字も大きくなりスペースも広がった。より目立つようになった。父もまた張り切っているだろう。さっそく先日、父の文章を見つけた。

2008/10/11

「私が薦める信毎」

下諏訪地区最優秀PR賞

祖父の七回忌

祖父の七回忌法要が先日行われた。この日に合わせて、祖父が生前作った俳句の中から一句を選んで句碑を建てることだけれど、なく持ち上がり、その除幕式も行われた。

祖父が入院したのは、脱穀も終わりようやく一年の取り入れが終ったところだった。内臓の変調を訴え、本人もほんの検査入院のもりでいたし家族もそう思っていたが、しばらくしてがんであることを知らされた。あと半年と医者に言われ、それでも正月には家に帰れるだろうということだった

が、結局それもかなわず十二月に他界した。

祖父が日々つぶっていた日記は七十二年の歳月を数え、その直前まで続いた。最後は達筆なはずの祖父の文字が子供の字のようになっていたが、それでも一生懸命に書かれていた。晴耕雨読をならわいとし、日々の暮らしを冷静に見つめて書く中で、俳句や短歌を詠み続けていた。自らの喜寿を記念して句集を自費出版し、八十八歳の祝いには孫たちで第二集をと思っていたが、結局は間に合わず遺稿集という形での出版になってし

まった。

句碑の除幕式には、四十名近くがわざわざ駆けつけてくれた。親類はもちろんのこと、祖父が生前俳句の指導をしていた人たちや、村の役員たちなどだった。他界してからもう丸六年が経過したというのに、祖父の思い出話は尽きることもなく続いた。

「いつまでも頭を使っていることが、ボケない秘けつだ」といつも言っていた。実際に八十歳を過ぎて、老若男女の相談相手であり続けた。願わくば僕が結婚してひ孫の顔を見せてやりたいと思っ

ていたが、ちょっとそれも間に合
わなかった。

句碑は祖父の生まれ育った家の
庭に建てられた。

富める家貧しき家も雪の中

生涯を農業に従事してきた祖父
が、もつとも気に入っていた俳句
である。句碑がいつまでもそこに

残るように、僕の心の中に刻み込
まれた祖父の思いもまた、生涯消
えることはないだろう。

1991年
信濃毎日新聞 生活雑記

おおきくなあれ

あめのつぶつぶ ももに入れ
ぽちよん ぽちよん ちゃぽん
ぽちよん ぽちよん ちゃぽん
おもくなれ ピンクになれ

あめのつぶつぶ すいかに入れ
たぶん たぶん ぽちよ
たぶん たぶん ぽちよ
まるくなあれ おいしくなれ

ごはんのつぶつぶ ぼくに入れ
ぱくん ぱくん ごくん
ぱくん ぱくん ごくん
おおきくなれ 元気になれ

第10回島木赤彦童謡コンクール佳作

夜の星あれる火の粉に重なりて

やみ夜を照らすキャンプファイヤー

第25回全国短歌フォーラムin塩尻
学生の部 秀作賞

つなひき

おじいさんは、山へたきぎを取りに来ました。もう冬も近いので、里が雪でおおわれる前に、春まで使うたきぎをとらなければなりません。

たきぎは冬の間、こたつやいろり、ふろで使います。枝をはらったり、木を切ったり、かれ枝をひろったりして、それをなわでたばねて家へ運ぶのです。

日もくれてきました。おじいさんはできあがったたきぎのたばをせおって山を下って行きました。

あしたもここへ来るので、なわは置いてゆきました。

おじいさんが帰った後、こかげから一匹のネズミが出てきました。

そいつは、どこにでもいる『新しいものを見れば、どうしてもさわってみたくなる』子ネズミでした。

子ネズミはおじいさんの置いていったなわをじっと見ていました。なわはぐるぐると巻かれていて、たばになっていました。子ネズミは、そのたばの中に何があるか知りたくなりました。そこで、近づいていつてのぞき込んで見ました。けれど暗くて何も見えません。

「そうだ。なわをほどこいてみよう。中が見えるかもしれない」

そこで子ネズミは、なわのはしっこを両手でつかんで引っ張ってみました。

すると、なわはどんどんほどこけていきました。

ずるずると、子ネズミはどんどん引っ張ってゆきました。

そして、もうそろそろ全部ほどこけたかな、と子ネズミが思った時でした。

とつぜん、なわがピンと張って、子ネズミは後ろへ引っ張られました。

「やや、これはどうしたことだ。だれかがこのなわを取ろうとしているのか。しかし、これはぼくのものだ。負けないぞ」

子ネズミは、ほっぺをふくらませて力を入れて引っ張りました。でも、少しずつ後ろへ下がってゆきます。

なわの反対側では、ヤマネコがすわったまま、片手でなわを引っ張っていました。

そいつは、どこにでもいる『動くものが目の前に来たら、さわらなくては気がすまない』ヤマネコでした。

ヤマネコがこかげで眠っていたら、ずるずるという音がして、目の前をゆっくりとなわが動いて行きました。その様子をずっと見ていたヤマネコですが、なわのはしっこが通り過ぎて、どんどん向こうへ動き始めたので、思わずはしとつかんでみたのです。そしたら、簡単に動きが止まりました。